

[授業科目名] 子どもケアフィールドワーク		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 村岡真澄 戸田須恵子 堀内久美子 采女智津江
[単位数] 4	[必修・選択] 選択	[備考] 日進市内の保育所、小学校、中学校、附属幼稚園、学部付設子どもケアセンターにおける実践的研究	
授業の到達目標及びテーマ 各専門分野のフィールド研究の方法論を深く学びながら、院生各自の研究テーマを位置づけることで、新たなフィールド研究の方向性を見出す。			
授業の概要 修士論文に結びつく課題研究を前提に、本研究科の教育課程を構成する応用研究の5領域毎に、院生一人ひとりが思考する分野の実証、実践的な研究の場として、当該研究科が設置される日進市の中学校、小学校、幼稚園、保育所、医療機関、児童施設及び子育て支援組織等で、実践的・臨床的研究を行う。 また、各フィールドにおいて初等教育の臨床的経験・調査、幼児教育における環境構成・児童文化、児童相談の専門的援助活動の現状と課題、医療機関における保育士の必要性などのフィールドで観察を行う。これらの体験を通して、子どものリアルな姿を把握し、子どもケアの実際を理解するとともに、各自の研究課題を探索的に発見することを目指す。発達臨床の立場による乳幼児期の遊びの観察、統合保育・教育の実際、児童への学級や保健室での支援、小中学生における学校カウンセリング・心理療法の実際・虐待等に対する子どもケアセンターの相談の内実や相談の過程を取り上げる中で、院生一人ひとりの子どもケアの在り方について考察する。			
学生に対する評価の方法 授業中の活動度、レポート、フィールドワーク先からの評価により総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1～3回 フィールドワーク先の決定及び研究課題の設定 第4回～第14回 フィールドワーク先での実践的、実証的研修並びにレポート等の発表と検討 第15回 フィールドワークについてのまとめ			
使用教科書 参考文献: ヒューマンケアを考える -さまざまな領域からみる子ども学- 井形昭弘編著			
自己学習の内容等アドバイス フィールドワーク先における現状について理解を深めるとともに、諸問題についても自分なり意見が見いだせるよう、積極的に取り組むこと。			

[授業科目名] 子どもケア特論A		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 末松弘行、村岡眞澄、平井タカネ
[単位数] 2	[必修・選択] 必修	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ テーマの「子どもケアとはなにか」について、幼児保育・児童教育の立場から論じる。 子どもケアについての概念を形成するのが、到達目標である。			
授業の概要 全人的ケアすなわち、身体・精神・社会などさまざまなものを総合・統合して子どもケアを考える。 精神発達や人間関係からもみてみるとともに、乳幼児期のケアの原点に立ち帰り、自己表現とコミュニケーションについても論じる。風土の中で培われる子育て文化についても述べる。 また、「遊び」と子どもケア、ことに遊びを通しての保育の理念に基づく指導を総論的に述べる。			
学生に対する評価の方法 オムニバス方式で開講、担当教員の終了時に提出させるレポート及び学習意欲等を総合的に判断し、コーディネーターの末松が評価する。 評価は、授業中の活動度(30%)、課題に対する討議・発表(30%—積極性等)、レポートの提出(40%—内容とまとめ方・質疑応答の対応)で総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第 1回 オリエンテーション(末松) 第 2回 子どもケアとは(末松) 第 3回 心理学、心身医学(全人的ケア)の立場からみた子どもケア(末松) 第 4回 精神発達の視点からみた子どもケア(末松) 第 5回 人間関係からみた子どもケア(末松) 第 6回 特に、保育、教育学の視点からみた子どもケア(平井) 第 7回 乳幼児期とケアの原点(平井) 第 8回 自己表現とコミュニケーション(平井) 第 9回 風土の中で培われた子育て文化(平井) 第10回 保育施策と今日的課題(平井) 第11回 「遊び」と子どもケア(村岡) 第12回 遊びを通じての保育の理念に基づく指導(村岡) 第13回 基本的な生活習慣(村岡) 第14回 保育内容の構造化(村岡) 第15回 全体のまとめとディスカッション(末松)			
使用教科書 参考文献:ヒューマンケアを考えるーさまざまな領域からみる子ども学ー 井形昭弘編著			
自己学習の内容等アドバイス 授業に関わる時事的な問題について、新聞やインターネットを活用して理解するよう努めること。			

[授業科目名] 児童比較教育学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] Michelle H. Morrone
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 比較教育がどのような学問領域によって構成されるかについて検証する。更に過去に数々の試行錯誤を繰り返した結果、児童比較教育学が如何に同一文化内、或いは異文化間において差異や同一性を生み出し、問題を提起してきたかも紹介し、学際的な比較教育分野の学問的思考を解説し、次に最も関連の深い児童比較教育に分野について視野を広げる。			
授業の概要 受講生は比較教育学から、社会学、心理学、人類学、政治学及び哲学等に至る内容の文献を読むに従い、児童比較教育の分野が如何に学際的なものであるかについて理解を深める。 更に、特論で得た知識を基に、後期の具体論を討議する児童比較教育学演習に繋げていく。			
学生に対する評価の方法 討議・発表を含む講義形式とし、受講者は学術的研究を行った最終レポート並びに他の受講者からのディスカッションの取り組みから総合判断し、評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 introduction 第 2回 児童比較教育と国民国家 第 3回 児童比較教育と国際社会 第 4回 児童比較教育と比較文化 第 5回 児童比較教育と教育方法 第 6回 児童比較教育と経済事情 第 7回 児童比較教育と社会事情 第 8回 児童比較教育と国際環境 第 9回 児童比較教育と心情心理 第 10回 児童比較教育と宗教 第 11回 児童比較教育の研究 第 12回 児童比較教育の方法 第 13回 児童比較教育の課題 第 14回 児童比較教育の必要性 第 15回 conclusion			
使用教科書 講義時にテキストを配布する。 参考文献はその都度提示していくので必読のこと。			
自己学習の内容等アドバイス 平素から、異文化や日本以外の教育について、興味をもって考え、議論や論理的な知識をたかめておくこと。			

[授業科目名] 児童比較教育学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] Michelle H. Morrone
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 教育環境、教育制度、教育文化などの諸問題を日米の比較を対象として掘り下げて研究することにより、それぞれが現代における子どもの成長にどのような役割を果たしているか、現状の問題を生む要因が何処にあるかを探求していく。 特に日本における保育園と幼稚園の比較分析等を通して、幼保一元化、小幼連携等の問題分析に繋げたい。			
授業の概要 この演習は、児童比較教育分野における今日の問題を調査することに、知的関心を抱く意欲的な院生向けのものである。我が国の児童教育の有様はその歴史文化、政治経済等の多様な社会状況によって構築されてきたものであるが、例えば日本よりも歴史の浅い米国のそれらとの比較を多様な文献、資料を当たることにより、分析していく。			
学生に対する評価の方法 討議・発表を主とする演習方式とし、受講者は学術的研究を行った最終レポート並びに他の受講者からのディスカッションの取り組みから総合判断し、評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 紹介 第 2 回 児童比較教育とは 1－日本教育事情 第 3 回 児童比較教育とは 1－日米の比較 第 4 回 日本と米国の児童教育 1－教育方法 第 5 回 日本と米国の児童教育 2－社会・環境 第 6 回 日本と米国の児童教育 3－習慣・文化 第 7 回 日本と米国の児童教育 4－PTAの在り方 第 8 回 日本と米国の児童教育 5－父親の役割と母親の役割 第 9 回 日本と米国の児童教育 6－コミュニティーとボランティア 第 10 回 課題の分析 1－制度(保育所と幼稚園) 第 11 回 課題の分析 2－少子化 第 12 回 課題の分析 3－教育費 第 13 回 課題の分析 4－ゆとり教育 第 14 回 課題の分析 5－個性 第 15 回 まとめ			
使用教科書 講義時にテキストを配布する。 参考文献はその都度提示していくので必読のこと。			
自己学習の内容等アドバイス 平素から、異文化や日本以外の教育について、興味をもって考え、議論や論理的な知識をたかめておくこと。			

[授業科目名] 保育内容特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 村岡眞澄
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この授業では、保育内容の核となる遊びに関連した種々の文献や園での遊びの実践事例を参考にしながら、「『遊び』を通しての教育」という理念についての理解を深める。また遊びを通しての教育の理念に基づく幼児の健康指導の基本的なあり方およびその方法について追究する過程で、研究に必要な理解力、論理的な思考力、分析力等を身につける。			
授業の概要 授業の前半では、保育内容の核となる「遊び」について古典的遊び理論、Huizinga, J. や Caillois, R., 西村清和などの種々の遊び論を概説してその系譜を辿ると同時に、保育の場での「遊び」の概念についても概観し、保育としての「遊び」とは何かを明確にする。後半期では保育内容「健康」を中心としながら、遊びを通しての保育の理念に基づく指導の基本的なあり方や指導方法を追究する。同時に保育内容の構造化や指導の理論化についても言及する。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み態度（40％）と教科書や種々の文献講読に関するミニレポートや期末のレポート（60％）を合算して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「遊び」とは何か 第2回 古典的遊び理論の系譜 第3回 遊びの意味を問う。Huizinga, J. や Caillois, R. の遊び論—遊びの存在論的解釈 第4回 乳幼児にとっての遊びの意味—矢野智司等の遊び論を参考に 第5回 保育の場での「遊び」—西村清和等の遊び論を参考に 第6回 遊び論のまとめと保育 第7回 乳幼児の遊びと健康—運動的な遊びの意味 第8回 乳幼児は身体・運動遊びを通して何を学んでいるのか。 第9回 主体としての身体の意味—間身体性 第10回 運動と認識—「心の中の身体（マークジョンソン）」を参考に 第11回 遊び（楽しさ）を軸とした保育内容の構造化と指導Ⅰ 第12回 遊び（楽しさ）を軸とした保育内容の構造化と指導Ⅱ 第13回 幼児が自ら意欲的に取り組む運動遊びの指導 第14回 幼児が自ら意欲的に取り組む基本的な生活習慣の指導 第15回 まとめ			
使用教科書 西村清和 「遊びの現象学」 勁草書房（こちらで準備しますので購入の必要はありません。） 参考書・参考資料等 矢野智司 『意味が躍動する生とは何か』 世識書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回行う授業内容を伝え、指示した教科書の範囲や配布した資料について予習しておくこと。また予習の中で理解できない事柄や用語があれば記述しておくこと。			

[授業科目名] 保育内容演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 村岡眞澄
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 受講者同士が互いに学び合いながら、子ども理解、乳幼児の身体・運動発達や興味をふまえた遊びの提示、保育者の指導・助言、環境面の工夫、家庭との連携等々の総合的視点から、子ども自らが意欲的に取り組む健康指導のあり方や具体的な指導方法について追究し理解する。			
授業の概要 運動や健康・安全指導に関連した内外の諸文献を取り上げ演習する。同時に保育所や幼稚園での実践記録やビデオなどによりまた実際に保育を観察するなどして、子ども理解、発達や興味に応じた遊びの提示や環境の設定、言葉かけ、保育者の指導・助言等々のキーポイントについて発表討議を行い、望ましい健康指導のあり方や具体的な指導方法を追究する。			
学生に対する評価の方法 授業中の討議などへの参加態度（50%）や授業中に課すミニレポート、期末のレポート（50%）を総合し、子ども自らが意欲的に取り組む健康指導のあり方や指導方法についての理解ができているか、またレポートや観察記録から子どもの捉えがきちんとできているかなどの観点から評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 乳幼児の身体・運動発達と指導に関する実践や研究の現状とその問題点 第2回 「健康」指導の実践的指導力、専門性について—ビデオ、保育記録を参考に 第3回 「健康」指導の実践的指導力、専門性について（1）—運動遊びの場面で 第4回 ビデオや保育記録を参考にグループで話し合い発表しレポートする。 第5回 「健康」指導の実践的指導力、専門性について 第6回 ビデオや保育記録を参考にグループで話し合い発表しレポートする。 第7回 幼稚園での保育観察。（課題：観察レポートの作成） 第8回 保育観察に基づいての意見交換、討議 第9回 「健康」指導の実践的指導力、専門性について（2）—生活習慣（食事、片付け等々）の場面で 第10回 ビデオや保育記録を参考にグループで話し合い発表しレポートする。 第11回 保育園での保育観察（課題：観察レポートの作成） 第12回 発達やねらいに合った遊びの提示、環境とは—ビデオ、保育記録を参考に 第13回 子ども自らが意欲的に取り組む健康指導とは（遊びの指導を中心に） —ビデオ、保育記録、保育観察を参考に 第14回 子ども自らが意欲的に取り組む健康指導とは（生活習慣の指導を中心に） —ビデオ、保育記録、保育観察を参考に 第15回 まとめ			
使用教科書 なし 随時資料を準備する 参考書・参考資料等 平井タカネ、村岡眞澄、河本洋子「新子どもの健康」 三晃書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業で取り上げる保育事例や文献に目を通し、疑問に思ったり感じたり考えたりしたことを簡単にまとめておく。また課題に関連すると思われる保育記録なども文献等から調べておくことが望ましい。			

[授業科目名] 児童の表現文化演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 平井タカネ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 幼児・児童期の子どもたちが身体の表現性（動作のリズム、しぐさ）に対する興味関心について、子ども達が模倣をして楽しんでいるテレビやアニメの人物の動作特性をテーマとし、明らかにする。			
授業の概要 幼児・児童期の子ども達の身体表現について理解を深める。また、それらの子ども達が模倣をするなど興味や関心を示す人気者の表現特性について、資料を集めて研究報告する。 フィールド：地域の祭りや行事に見られる子どもの参加風景を観察し、子どもの動作や所作、大人たちの指導や期待についてレポートする。			
学生に対する評価の方法 児童の身体表現に対する関心とそれを深めるために積極的なアプローチをしているか。そのプロセスのまとめと報告、さらにフィールド授業への参加態度などから総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：本授業の目的と内容等の説明、ガイダンス 第2回：教科書「子ども文化の原増」の第2章のプリント資料講読 第3回：幼児・児童期の身体表現について、教科書の考察と意見交換（1） 第4回：文献「身ぶりと音楽」の講読（1） 第5回：同上の考察と発表、意見交換、まとめ（2） 第6回：各自、テレビやアニメの人気者とその特性について情報収集とレポート・プレゼンテーション（1） 第7回：〃（2） 第8回：〃（3） 第9回：幼稚園や小学校の遊戯会、運動会の見学（1） 第10回：〃（2） 第11回：小牧市大久佐八幡宮の秋祭りと子ども 見学、インタビュー（1） 第12回：〃（2） 第13回：役割ごとに見学・インタビューのまとめと発表（3） 第14回：幼・児童期の表現、地域文化に見る子どもの意味についてまとめ 第15回：まとめ			
使用教科書 ① 岩田慶治編：子ども文化の原像、日本放送協会、1985 ② 野村・鈴木編：身ぶりと音楽、東京書籍、1990			
自己学習の内容等アドバイス 子ども達が遊びの中などで模倣しているアニメの人気者とその特性、地域の祭りや行事での子どもの位置づけ、などに注目して、子ども達の心身表現に関する情報を集める。			

[授業科目名] 発達心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 戸田 須恵子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「人はどのように発達するか」をテーマに授業を進め、発達に関するより深い知識を習得すると同時に、自己の成長をより理解することが到達目標である。			
授業の概要 生涯発達の観点から発達を胎児期から青年期までを学習する。発達過程において、子どもを取り巻く環境（家庭、社会など）が発達にどのように影響しているのかについても学習する。さらに、現在、社会的問題となっている虐待や不登校、引きこもりなどの問題に関しても取り上げ、最近の研究論文や今まで研究してきた実際のデータを使用しながら発達に関する理解度を深める。			
学生に対する評価の方法 各発達段階が終わった時点で課題を出す。レポート提出は大体5回～6回程度である。評価する観点は内容やまとめ方、さらに、感想だけでなく意見やコメントも書かれているかに注目して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。授業についての概要及び評価について説明する。受講者の関心事を聞き、授業の中でその関心事について取り上げていく。 第2回 発達理論、発達心理学の基本的問題（遺伝と環境など）について学習 第3回 研究方法と統計について学習 第4回 胎児期の発達と障害について（身体・運動の発達） 第5回 乳児期の発達と障害について（認知、情動の発達など） 第6回 幼児期前期の発達と障害について 第7回 幼児期後期の発達と障害について 第8回 障害児の種類と特徴について 第9回 障害児の社会性の発達について 第10回 児童期の発達と学校生活について 第11回 発達と教育（学習と動機づけなど）について 第12回 青年期の発達と特徴（人格と自我形成など）について 第13回 青年期の病気、進路及び社会生活について 第14回 発達支援（家庭・地域・学校・福祉・医療の視点から）について 第15回 授業の総まとめと全体的討論			
使用教科書 「人間の発達を考える」 山内宏太郎編 北樹出版（1997）			
自己学習の内容等アドバイス 授業を通して、子どもの心身の発達の知識を習得し、子どもの発達を促進するためにどのような支援ができるかを考える力をつけてほしい。			

[授業科目名] 発達心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 戸田 須恵子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「発達の専門家になろう」をテーマとし、子どもの発達をより深く理解し、社会的に問題となっている子どもの様々な問題と子どもを取り巻く環境（家庭、学校、地域、対人等）についての幅広い知識、現場で役立つ知識を習得することが到達目標である。			
授業の概要 発達心理学特論で学習した知識をさらに深めて発達心理学に関しての専門性を研鑽していく。専門性を高めるために、発達に関する問題や関心事を発表、討論する。又、社会的に問題となっている様々な子どもの問題等を子育て支援の観点と関連させながら全員がそのテーマを共有し討論していく。又、受講者は、関心のある領域の先行研究論文を検索し発表して幅広い知識を学習する。			
学生に対する評価の方法 評価は、授業中の活動態度（30%）と課題や先行研究論文の発表（30%）とそのまとめをレポートとして提出（40%－内容とまとめ方など）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等）			
第1回	ガイダンス。授業についての概要及び評価について説明。学生から修士論文に関する情報を得る		
第2回	発達心理学、臨床心理学などからの子育て支援について意見発表と全体で討論		
第3回	現代の子どもの社会的問題を発達と子育て支援との関連について考え、実践していく方法についても考え、全体で討論		
第4回～5回	先行研究を紹介し（発達心理学研究など）、研究論文の読み方を学習する①		
第6回～7回	先行研究を紹介し（発達心理学研究など）、研究論文の読み方と書き方を学習する②		
第8回～9回	受講者は修士論文のテーマに関する研究論文を検索・発表し全体で討論 発表後、レポートとして提出		
第10回～11回	研究方法（データ収集、分析、統計など）について学習及び討論		
第12回～13回	子育て支援の担い手として何が出来るか全体で討論		
第14回	論文の書き方について学習及び討論		
第15回	修士論文に向けての話し合い		
使用教科書 「子育て支援に生きる心理学―実践のための基礎知識」 繁多進編 新曜社（2009）			
自己学習の内容等アドバイス 修士論文で何を研究したいのかを明確にするため、それに関連する多くの先行研究論文を読んでほしい。			

[授業科目名] 臨床心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 末松 弘行
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を学び、児童・生徒をよりよく理解し、彼らの諸問題に取り組めるようになるのが、テーマである。そして、心理学の応用によって、諸問題をよく理解し、より高度の教師としての技量を身につけるのが到達目標である。			
授業の概要 臨床心理学のアセスメント法や面接法により、児童・生徒をより理解できるようになるであろう。次に、リラクセス法、分析的方法、行動論的方法などさまざまな心理療法の技法を会得し、それらをカウンセリングの中で活用することによって、援助できるようになる。一方、心身症、精神疾患、不登校、いじめなどの特殊な状態についても対応法などを学ぶ。また、医療機関や福祉機関との連携などチーム・アプローチについても考える。			
学生に対する評価の方法 試験またはレポート 50%、受講態度 20%、出席 30%。レポートは単にインターネット等で調べたことでなく、各自の考えなど独特のものを評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 臨床心理学の基本的発想 第 2 回 アセスメント（1）知能検査 第 3 回 アセスメント（2）臨床検査、テストバッテリー 第 4 回 面接、カウンセリング 第 5 回 介入（家族、学校、職場） 第 6 回 ストレス 第 7 回 心理療法（1）自律訓練法、リラクゼーション 第 8 回 心理療法（2）精神分析、交流分析 第 9 回 心理療法（3）行動療法 第 10 回 心理療法（4）家族療法、その他の治療法、統合的アプローチ 第 11 回 臨床心理学の対象（1）心身症 第 12 回 臨床心理学の対象（2）精神疾患、DSM-IV、気分障害 第 13 回 臨床心理学の対象（3）児童・生徒の問題 不登校、いじめ、虐待 第 14 回 他機関との連携 医療機関、福祉機関 第 15 回 文献抄読			
使用教科書 坂野雄二・菅野 純・佐藤正二・佐藤容子 著『臨床心理学』有斐閣			
自己学習の内容等アドバイス 次回の講義のテーマを予告するので、教科書等で予習しておくこと。			

[授業科目名] 臨床心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 末松 弘行
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 臨床心理学を応用して、児童・生徒の問題に取り組む演習をするのがテーマである。そしてより高度の教師として、現場の諸問題を心理学の活用によって理解できるようになるのが到達目標である。			
授業の概要 まず、心理教育的アセスメントとは何かについて学び、さまざまなアセスメント方法、例えば、知能テスト、CMIなどの臨床テスト、臨床研究にも活用できるPOMSなどのテストについて習熟する。次に、子どもとの面接法についてその技法を演習する。それについては、ビデオをみたり、テープを聴いたり、視聴覚教材も利用する。それらの仕上げとして模擬面接実習もする。さらに、自律訓練法や交流分析の実際についても学び、コラージュや箱庭も自分で作ってみる。その上で、摂食障害、気分障害、不登校への対応をシュミレートしてみる。			
学生に対する評価の方法 試験またはレポート 50%、受講態度 20%、出席 30%。レポートは単にインターネット等で調べたことだけでなく、各自の考えなど独自のものを評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理教育的アセスメントとは 第2回 アセスメント（1）知能検査 第3回 アセスメント（2）CMI、うつ尺度 第4回 アセスメント（3）STAI、POMS（臨床研究への活用） 第5回 アセスメント（4）その他のテスト、心理検査について、テストバッテリー 第6回 面接法 子ども面接 第7回 カウンセリング技法（1）ビデオ鑑賞 第8回 カウンセリング技法（2）模擬面接 第9回 自律訓練法の実際 第10回 交流分析の実際 第11回 コラージュ・箱庭療法の実習 第12回 摂食障害への対応 第13回 気分障害への対応 第14回 不登校への対応 第15回 文献の抄録			
使用教科書 特に使用しない。心理テスト用紙や必要な資料は配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回の演習のテーマを予告するので、文献などによって予習しておくこと。			

[授業科目名] 小児医学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 都 築 一 夫
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 小児によくみられる疾患についての理解を深め、その日常生活の管理、病児および家族への適切な指導、健康の増進への助言とともに、その基礎となる年齢や成長に伴う生理機能、病気、病態の違いを正しく理解することを到達目標とする。 小児の正常な成長・発達を支援し、健康の増進や生活習慣病の予防、感染症の予防や蔓延の阻止、疾患を有する児童・生徒の日常生活を管理・指導するための知識の獲得がテーマである。			
授業の概要 小児によくみられる疾患、健康の増進や生活習慣病の予防、感染症の予防や蔓延の阻止、慢性疾患児の管理や指導などをテーマに、毎回、予め課題（テーマ）を与えて発表させ、それに対し質疑応答を行い、最後に不十分な点を補足しまとめを行う。			
学生に対する評価の方法 毎回の授業開始時に、前回の授業内容から小テストを出題し成績を評価する。また次回の授業内容からテーマを与えて次回の授業で発表させ、発表までの過程と内容を評価して成績に加味する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 はじめに（子どもの特徴） 第 2 回 アレルギー総論 第 3 回 気管支喘息 第 4 回 食物アレルギー、アナフィラキシー 第 5 回 アトピー性皮膚炎と子どもの皮膚病 第 6 回 子どもに多い感染症（学校伝染病）とその取り扱い 第 7 回 若年者で問題となる感染症 第 8 回 食中毒と消化器感染症 第 9 回 子どもにおける成長の評価 第 10 回 肥満と生活習慣病 第 11 回 子どもの心臓病 第 12 回 子どもの腎臓病 第 13 回 小児慢性疾患の管理と指導：小児慢性腎疾患を例に 第 14 回 思春期医学 第 15 回 まとめ			
使用教科書 黒田泰弘 編「最新育児小児病学」南江堂、鴨下重彦・柳澤正義「こどもの病気の地図帳」講談社 参考書・参考資料等 森川昭廣ほか「標準小児科学」医学書院、大関武彦ほか「小児科学」医学書院、五十嵐隆 編「小児科学」文光堂、日本小児科学会「思春期医学臨床テキスト」診断と治療社、日本学校保健会「児童生徒の健康診断マニュアル」、衛藤隆 編集「学校医・学校保健ハンドブック」文光堂、岡部信彦「最新感染症ガイド」日本小児医事出版社、シリーズ「小児科ピクシス」中山書店 など			
自己学習の内容等アドバイス 広く医学・医療・健康などに関する知識を持つことは大事であるが、単なる博識に陥ることなく、子どもの発育・発達、病態生理などの基礎知識に裏打ちされた生きた知識の習得を心掛けて欲しい。世間には医学・健康に関する様々な情報が氾濫しているが、それらに惑わされることのない真偽を見極める目を養って欲しい。			

[授業科目名] 小児医学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 都 築 一 夫
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「小児医学特論」で取り上げたテーマにつき、これらを管理、指導、教育するなどの能力を高めるために、演習を通してその基本的なスキルを習得することを到達目標とする。 テーマは「小児医学特論」で学習した成長・発達への支援、疾患を有する児童・生徒の日常生活を管理・指導についての知識を、演習を通じ更に確実かつ実践的にすることである。			
授業の概要 「小児医学特論」で取り上げた各テーマにつき、実践に即した演習問題を与え、授業時間内にあるいは次回までにレポートとして解答を提出してもらう。			
学生に対する評価の方法 演習で取り上げた問題の解答やレポートにより評価する。管理、指導、教育などに関するレポートについては単に観念的なものではなく、対策など実行性のある対策が記されているかに重点を置き評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 はじめに 第 2 回 気管支喘息の管理 第 3 回 食物アレルギー、アナフィラキシーの予防と緊急時の対応－養護教諭・医療保育士の関わり－ 第 4 回 アトピー性皮膚炎と子どもの皮膚病におけるスキンケア－養護教諭・医療保育士の関わり－ 第 5 回 子どもに多い感染症（学校伝染病）の事例対応と予防接種－養護教諭・医療保育士の関わり－ 第 6 回 若年者で問題となる感染症の予防と対策 第 7 回 食中毒と消化器感染症の予防と対策 第 8 回 成長曲線とその評価 第 9 回 肥満とやせの評価とその対策 第 10 回 心電図：その判読と不整脈 第 11 回 検尿の実施とその評価 第 12 回 血圧・腎機能の測定とその評価 第 13 回 学校健診の実施に関する演習 第 14 回 思春期の医学的問題点とその指導・対策 第 15 回 まとめ			
使用教科書 黒田泰弘 編「最新育児小児病学」南江堂、鴨下重彦・柳澤正義「こどもの病気の地図帳」講談社 参考書・参考資料等 森川昭廣ほか「標準小児科学」医学書院、大関武彦ほか「小児科学」医学書院、五十嵐隆 編「小児科学」文光堂、日本小児科学会「思春期医学臨床テキスト」診断と治療社、日本学校保健会「児童生徒の健康診断マニュアル」、衛藤隆 編集「学校医・学校保健ハンドブック」文光堂、岡部信彦「最新感染症ガイド」日本小児医学事出版社、シリーズ「小児科ピクシス」中山書店 など			
自己学習の内容等アドバイス 現実の世界では物事が教科書どおりに運ぶとは限らない。当然、自分の力で解決を図らなければならない。学校教育や幼児保育の業務の中で問題を認識・整理し、更にはそれを解決する（解決への道筋をつける）能力を身につけて欲しい。			

[授業科目名] 発達免疫学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松岡 宏
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ この特論では、小児期の免疫能の発達を分子生物学的、細胞生物学的レベルで正しく理解し、現場での事例に対し自らの考えを構築できる、実践的な応用のきく知識と能力の習得を目指す。			
授業の概要 2009年新型インフルエンザパンデミックでも明らかのように、新興・再興感染症は、園・学校という子ども達の集団で第一波が発生し流行する。また、予防接種で防げない多くの感染症が毎年、子ども達を脅かしている。従って、病（後）児保育はもとより、園・学校で働くスタッフには、新しい感染流行に際して子ども達を守る必要十分な知識と能力が必須となる。小児期の免疫能は十分に準備されているが、感染に対して白紙状態でナイーブなために多くの感染症に罹患してしまうことを、小児期の免疫能の発達は未熟であると、必ずしも正しく理解されていないのが実情である。また、小児期の免疫発達によって病像・病態が変化していく、アレルギー疾患への対応も園・学校現場における重要な課題となっている。			
学生に対する評価の方法 適宜、小テスト・小論文を提出させて、評価する。授業中の態度、質問内容や出席回数も考慮する。場合によっては、総合テスト、総合論文の提出を求める。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 ヒト免疫システムの胎生期から乳児期に至る個体発生を、系統発生と比較しつつ考察する。 第 2 回 MHC (HLA) システムの個体発生と系統発生学的意義について学習する。 第 3 回 小児期早期の免疫システムの特徴、ナイーブであることについて、細胞生物学的に解析する。 第 4 回 抗原提示細胞と T、B 細胞協同作用について分子生物学的レベルで理解する。 第 5 回 DNA 再構成機構：V(D)J 再構成とクラススイッチの仕組みについて学ぶ。 第 6 回 マクロファージ、K 細胞、NK 細胞、細胞障害性 T 細胞による殺細胞機構について学ぶ。 第 7 回 自然免疫の分子機構について学ぶ。 第 8 回 サイトカインとシグナル伝達機構について学習する。 第 9 回 疾患遺伝子クローニング “Reverse Genetics” について、いくつかの分子生物学的方法を学ぶ。 第 10 回 遺伝子トランスフェクションと遺伝子治療について学習する。 第 11 回 トランスジェニックマウスと遺伝子標的法の応用と意義について学ぶ。 第 12 回 細胞融合法とモノクローナル抗体について、理論、方法、応用と意義について学ぶ。 第 13 回 原発性免疫不全症における疾患遺伝子と障害分子。 第 14 回 アトピー性素因とは。アレルギー疾患の家族集積性の実際とその背景。 第 15 回 小児期の腸管免疫の発達と食物アレルギーにおける耐性獲得。 概要 1 から 15 に従って、配布資料を基にパワーポイントを用いて講義する。			
使用教科書 特になし。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時間中に適宜資料を配付していくので、授業実施までに内容を確認し、文献・資料をよく読んでおくこと。			

[授業科目名] 発達免疫学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松岡 宏
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 小児期の免疫能の発達について、特論で学んだ知識の理解を深めてより実践的応用のきくものとする。			
授業の概要 最新の知見、分子生物学的手法、細胞生物学的手法に加えて、各々のテーマにそって、複雑で巧妙な生体防御機構の重要な部分が障害されたヒト原発性免疫不全症と遺伝子欠損マウス（ノックアウトマウス）などの具体的事例について、ディスカッション形式で、データを検討し、病像・病態を分析し学習する手法をとる。			
学生に対する評価の方法 授業態度、ディスカッションへの参加状況およびその内容と適宜実施する小テスト、小論文などで評価する。必要であれば、総合試験やレポートでの評価も行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 ヒト免疫システムの胎生期から乳児期に至る個体発生とリンパ系細胞の分化と微小環境。 第 2 回 小児期免疫発達研究のための細胞生物学的手法について 第 3 回 小児期免疫発達研究のための分子生物学的手法について 第 4 回 小児期早期の免疫システムの特徴、ナイーブであることについて （研究論文データの検討） 第 5 回 抗原提示細胞と T、B 細胞協同作用、免疫グロブリンクラススイッチ （伴性高 IgM 症候群） 第 6 回 抗体の特異性と多様性、DNA 再構成機構 （RAG1.2 ノックアウトマウスと重症複合免疫不全） 第 7 回 K 細胞、NK 細胞、細胞障害性 T 細胞による殺細胞機構（慢性活動型 EBV 感染、XLP） 第 8 回 サイトカインとシグナル伝達機構 （伴性無ガンマグロブリン血症、伴性重症複合免疫不全） 第 9 回 疾患遺伝子クローニング “Reverse Genetics”（ブルトン遺伝子クローニング） 第 10 回 遺伝子トランスフェクションと遺伝子治療（ADA 欠損症の遺伝子治療） 第 11 回 トランスジェニックマウスと遺伝子標的法の応用と意義（ノックアウトマウス） 第 12 回 好中球機能：接着・遊走・食食・殺菌（白血球接着不全症、慢性肉芽腫症など） 第 13 回 免疫記憶と予防接種。乳児期におけるワクチン接種について、発達免疫学的にみた合理性を考察する（研究論文データの検討） 第 14 回 アレルギー素因、アレルギー遺伝子（研究論文データの検討） 第 15 回 腸管免疫とトレランス（食物アレルギーにおける耐性獲得と経口免疫療法）			
使用教科書 特になし。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時間中に適宜資料を配付していくので、授業実施までに内容を確認し、文献・資料をよく読んでおくこと。			

[授業科目名] 子ども栄養学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤 木 理 代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 子どもの成長と発育を支える栄養を、食べ物・人体・環境の観点から学ぶ。食べ物に関しては、成長期の子どもに必要な食事の内容および食べ方について理解する。人体については、成長期の身体的特徴・食物アレルギーなどの疾患・運動の役割・適切な生活習慣について理解する。環境に関しては、子どもの食生活の実態や食育をめぐる家庭および社会的状況、支援制度について理解し、子どもの適切な食環境を作るために、家族や社会が果たす役割を理解する。また、栄養教諭を含む管理栄養士と連携した教育活動を行うために必要な知識や、食育に関する取組みについて理解する。			
授業の概要 人のライフステージごとに考えた場合、とりわけ成長と発育において、子ども栄養は重要なものはいままでもない、ここでは食べ物・人体・環境の観点からそれぞれの事項について、検討するとともに、議論を通してそれぞれにおける諸問題を明らかにしていく。			
学生に対する評価の方法 平常点（40％）及び課題レポート（60％）で評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 体を作る食べ物・体を動かす食べ物 第 2 回 成長・発育に必要な食べ物 第 3 回 食事と疾患（食物アレルギー） 第 4 回 食事と疾患（小児メタボリックシンドローム） 第 5 回 食事と疾患（拒食症） 第 6 回 離乳食の進め方について 第 7 回 母子栄養の現状と課題 第 8 回 食に関する子育て支援制度について 第 9 回 子どもの食をめぐる現状と課題 第 10 回 学校における食育推進（学校給食を通じた食育の意義） 第 11 回 学校における食育推進（地産地消について） 第 12 回 学校における食育推進の現状と課題 第 13 回 体作りと運動（運動によるエネルギー代謝と骨格筋の形成） 第 14 回 課題発表とディスカッション 1 第 15 回 課題発表とディスカッション 2			
使用教科書 「小児栄養—子育て・子育てを支援する」堤ちはる 著、萌文書林 出版			
自己学習の内容等アドバイス 子どもを取り巻く社会で今問題となっていることは何か、各自事前に学習し授業に臨んで下さい。			

[授業科目名] 子ども栄養学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 藤 木 理 代
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「子ども栄養学特論」で学んだ知識を実践で活かすための技術を身につけるため、乳児・幼児・学童ごとにわけて、とりわけそれぞれの重要点を理解する。			
授業の概要 乳児に関しては、月齢に応じた離乳食の進め方や調理上の工夫の具体例を学ぶ。幼児に関しては、心と身体を育む食事の工夫を、栄養バランス・おいしさ・親子の絆をテーマに、手作りお弁当やおやつ作りの実例を通して学ぶ。学童に関しては、栄養教諭や学校栄養職員と連携して食育活動を行なうために必要な知識と技能を、様々な実践事例を通して学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業中のプレゼンテーション（50%）及び課題レポート（50%）で評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 離乳食の工夫（離乳初期の食べ物・食べ方） 第 2回 離乳食の工夫（離乳中期の食べ物・食べ方） 第 3回 離乳食の工夫（離乳後期の食べ物・食べ方） 第 4回 離乳食の工夫（離乳完了期の食べ物・食べ方） 第 5回 幼児の心と身体を育む手作りお弁当の実例（栄養バランスとおいしさの工夫） 第 6回 子どもの偏食を無くす工夫 第 7回 手作りおやつ工夫 第 8回 「食育活動」の意義（何を伝えるのか） 第 9回 「食育活動」における効果的な媒体の選択 第 10回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：朝食の大切さについて） 第 11回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：食物アレルギーについて） 第 12回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：身近な食材を使った献立） 第 13回 「食育活動」の実践事例の検討（テーマ：学校給食における地産地消） 第 14回 「食育活動」のプレゼンテーション 第 15回 「食育活動」のプレゼンテーション内容におけるディスカッション			
使用教科書 「小児栄養—子育て・子育てを支援する」堤ちはる 著、萌文書林 出版			
自己学習の内容等アドバイス 各現場で実施されている活動を事前に調べ、学ぶべき事柄を明確にしておきましょう。			

[授業科目名] 発達看護学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 中 村 朋 子
[単位数] 2	[必修・選択]	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 子どもは具合が悪くなったとき、発病したとき自分の心身の状態に関心を持ち、症状などを把握し、症状の緩和など自分で出来る看護を看護者と一緒に考え、実施している。また、看護者は子どもの発達段階を考慮して本人に出来る看護をさせている。このような看護について、子どもが疾病で入院し安静にしている時でも発育発達していることを理解する。			
授業の概要 看護の対象は新生児から高齢者まで幅広い。人々はそれぞれの発達段階において、その時期特有の課題を達成し、発達危機を克服しようとしている。その途上において遭遇するさまざまな傷害や疾病等の状況危機の克服と適応を支援することが看護の役割である。具体的な看護の援助は①教える、導く・育てる等保健教育、保健指導 ②見守る、保護する等傷病のケア③ 苦痛を和らげ、安楽を与える、それ以上悪化させないよう救急処置を行う等である。ここでは対象を幼児から児童生徒（以下子どもとする）に絞って講義する。			
学生に対する評価の方法 授業での積極的な発言などの態度、レポートによる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 成長発達とは 第2回 対象の発達の視点と評価 1) 形態的・身体的側面 第3回 対象の発達の視点と評価 2) 認知的側面 第4回 対象の発達の視点と評価 3) 心理・社会的側面 第5回 年齢別に自分の体験した傷病から心身面の変化どう認知しているか 第6回 1) 傷病に伴うさまざまな痛み・苦痛をどのように感じ表現しているか 第7回 2) 創傷の体験をどのように認知しているか 1) 年齢別にみる 第8回 3) 一人の体験を治癒するまで事例としてみる 第9回 4) 疾病抱えた子どもは自分の心身をどのように認知しているか ①感染症等日常ありふれた疾患 ②アレルギー疾患、心疾患 等慢性疾患を抱えた子ども 第10回 ③入院を体験した・している子どもは受けた検査や処置・看護をどう捉えているか 第11回 第12回 子どもを対象とした看護の役割 成長・発達への支援、家族 第13回 個々の子どもの発達に対応した看護の基本的援助技術 自分で出来ることはなにか、 1) 基本的な日常生活習慣（感染予防、清潔、排泄、食事など） 第14回 2) 発熱、電法、救急薬品など使い方 第15回 3) 頭痛・腹痛、気分不良・嘔吐等の症状の看護			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 急性の症状・疾病や慢性の疾病を抱えながら心身ともに発達していく子どもたちを理解し、どのような発達課題があるか、また、その援助方法を検討する。			

[授業科目名] 発達看護学演習		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 中 村 朋 子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ さまざまな看護の援助をするときに何でも看護者が援助するのではなく、発達段階も考慮しながらその子どもの理解や認知状態によって一つ一つの看護の援助が異なっていることを理解する。			
授業の概要 看護の対象は新生児から高齢者まで幅広い。この演習では対象を幼児から児童生徒（以下、子どもとする）までに限定する。子ども達の健康は健康水準の上位にあるものから、けがをしたり、急病になったり、慢性疾患を抱えていたり、医療的ケアを必要としたり、入院などで健康の水準が下がっているものまでさまざまである。これらの状況にある子ども達は自分の健康状態、疾病の状況、治療中であれば検査、治療内容をどのように理解・認知しているだろうか、経験を重ね、年齢が上がるにつれ、発達段階によって理解や認識は深まっているだろうか。文献や、子ども達との面接などを通して議論をすすめていく。			
学生に対する評価の方法 文献をまとめるとともに、子どもに面接を実施・その結果をまとめ、発表する。これらを総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1～5回 看護雑誌などの文献から疾病をもった子ども達が疾病についてどのように理解・認知しているか、どのような治療・看護を受けているか明らかにする。 アレルギー疾患・心疾患・糖尿病を持つ子ども、医療的ケアを必要としている子どもなど。同じ疾患でも年齢によって、症状によって治療・看護が違っていることを知る。 自分でどのようなことをしているか明らかにする。 第 6～10回 分担し、幼稚園、学校にいる子どもに面接を行いけがをしたり病気になったときの自分の心身の状態、治療の経過をどのように理解・認知しているか明らかにする。 1) 創傷・骨折などの経験者に治癒するまでどのように症状が変わり、どのような処置・看護を受けたか、自分では何をしたか 学校生活をおくる上で配慮したことなど治癒するまでの事例を収集する。 2) 慢性疾患を抱えているこども 1)と同様 3) 幼児から高校生まで同じような病気に（感冒などの感染症）罹患した子どもに発病から治癒するまでの症状の変化、治療の様子等を聞きまとめる。病気の理解、認知や看護したこと・してもらったこと、自分で出来ることなど、発達段階によって異なっていることを理解する。 第 11～14回 文献でわかったこと、面接でまとめたことを発表し合い検討する。 第 15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて文献・資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 学校保健や看護関連の文献・資料と疾病をかかえた子どもたちとの面接から、学校独自の援助の過程を検討する。			

[授業科目名] 子ども健康支援特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西村美佳
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 様々な子育て支援の実践的取り組みを理解し、その中に見られる課題を探り、これからの子育て支援のあり方を探ることを目指す。			
授業の概要 本授業では、子育て環境の変化や子育て支援の歴史的変遷を踏まえて、日本における様々な子育て支援の動向、海外における子育て支援に関する資料の講読を行う。特に、現代の親子が子育ての場面において抱えやすい心身の運動と健康にまつわる問題を幅広く取り上げ、その現状と対策について考察を深め、子育て支援の実践的な課題を見出す。			
学生に対する評価の方法 出席及び討論への参加の積極性と課題の遂行度 50% 講義内容の理解度及び発表・レポート 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 ガイダンス：授業の進め方と評価の方法について 第 2 回 現代における子育て①：子どもを取り巻く環境 第 3 回 現代における子育て②：仕事と家庭の両立課題 第 4 回 現代における子育て③：様々な保育サービス 第 5 回 日本における子育て支援の実際①：歴史的変遷（その 1） 第 6 回 日本における子育て支援の実際②：歴史的変遷（その 2） 第 7 回 日本における子育て支援の実際③：行政による取り組み 第 8 回 日本における子育て支援の実際④：保育所・幼稚園における取り組み 第 9 回 日本における子育て支援の実際⑤：様々な団体における取り組み 第 10 回 海外における子育て支援①：アジア各国における取り組み 第 11 回 海外における子育て支援②：欧州における取り組み（その 1） 第 12 回 海外における子育て支援③：欧州における取り組み（その 2） 第 13 回 海外における子育て支援④：カナダにおける取り組み 第 14 回 これからの子育て支援のあり方を探る 第 15 回 授業のまとめ			
使用教科書 特に指定しない。適宜、資料の配布を行い、参考図書を指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で紹介・提示する文献を読み、各回の授業の内容に関する自己の問題意識を醸成させて授業にのぞむこと。			

[授業科目名] 子ども健康支援演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 西村美佳
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 地域社会における子育て支援現場の現状と方策を理解するとともに、親子や保育所、地域の実態に応じた適切な子育て支援の方法を選択し、その内容を企画・実践していく力を形成する。			
授業の概要 身近な地域社会における子育て支援の現状と方策を理解するために、愛知県内における子育て支援の現状と方策について事例研究を行う。それを踏まえ、本学の子どもケアセンターにおける子育て支援プログラムに参加し、「子どもと運動」の観点からその内容や課題を討論する。また討論の結果を踏まえて、新たなプログラムを企画・実践する。			
学生に対する評価の方法 出席及び討論への参加の積極性と課題の遂行度 50% 発表・レポート 50%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 ガイダンス：授業の進め方と評価の方法について 第 2回 地域社会における子育て支援の現状と方策①：保育所における取り組みの実際 第 3回 地域社会における子育て支援の現状と方策②：幼稚園における取り組みの実際 第 4回 地域社会における子育て支援の現状と方策③：行政による取り組みの実際 第 5回 地域社会における子育て支援の現状と方策③：様々な団体による取り組みの実際（その1） 第 6回 地域社会における子育て支援の現状と方策③：様々な団体による取り組みの実際（その2） 第 7回 地域社会における子育て支援の現状と方策から見出される課題研究 第 8回 子どもケアセンターにおける子育て支援の実際①：プログラムへの参加と観察 第 8回 子どもケアセンターにおける子育て支援の実際②：プログラムへの参加と観察 第 9回 子どもケアセンターにおける子育て支援の実際③：保護者へのインタビュー 第10回 子どもケアセンターにおける子育て支援の事例研究：現状の理解と課題の検討 第11回 子どもケアセンターにおける子育て支援プログラムの企画と実践① 第12回 子どもケアセンターにおける子育て支援プログラムの企画と実践② 第13回 子どもケアセンターにおける子育て支援プログラムの企画と実践③ 第14回 子どもケアセンターにおける子育て支援プログラムの企画と実践④ 第15回 授業のまとめ			
使用教科書 特に指定しない。適宜、資料の配布を行い、参考図書を指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業に関わる文献を読み、自身の疑問や問題意識を明確にしたうえで、毎回の授業や実践的な活動にのぞむこと。			

[授業科目名] 子どもケア特論B		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 堀内久美子 戸田須恵子 采女智津江
[単位数] 2	[必修・選択] 必修	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ テーマの「子どもケアとはなにか」について、学校保健・健康教育の立場から論じる。 本講義では、前期の「子どもケア研究」を発展させ、学校保健・健康教育の面から子どもケアの考え方、子どものニーズを的確にとらえる方法、ニーズの充足のために必要なケアを選ぶ視点を考察し、養護教諭、スクールカウンセラーをはじめケアを提供する専門職の活動などについて、子どもケアの観点から理解するとともに、「子どもケアの何らかの実践」に関心をもち、主体的に考える姿勢を持つことを到達目標とする。			
授業の概要 「子どもとは」「ケアとは」の二面から「子どもケア」を多角的に追求する。養護教諭、スクールカウンセラーをはじめ、教師として実施しているケアの実例を収集し、「子どもケア」の理論と実践を考察する。			
学生に対する評価の方法 オムニバス方式で開講、担当教員の終了時に提出させるレポート及び学習意欲等を総合的に判断し、コーディネーターの堀内が評価する。 評価は、授業中の活動度（30%）、課題に対する討議・発表（30%—積極性等）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方・質疑応答の対応）で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション—「子どもケア特論B」を学ぶにあたって—（堀内） 第2回 「子ども」「ケア」に関する考察の角度・視点について（堀内） 第3回 子どもとは（子ども観の変遷、子どもの権利—生存権、健康の権利—）（堀内） 第4回 ケアとは（ケアの本質、関係性としてのケア、ケアの受け手と実施者）（堀内） 第5回 レポート発表「子どもケアの領域と実践例」（堀内） 第6回 学校保健・健康教育の立場から論じる「子どもケアとは」（采女） 第7回 子どもの発育発達（健康教育、学校保健面から）（采女） 第8回 ケアの領域と実践例（健康教育学）（采女） 第9回 養護教諭の活動例（子どもケアの視点）（采女） 第10回 レポート発表「学校保健・健康教育と『子どもケア』」（采女） 第11回 子どもの心理面の発達（戸田） 第12回 心理学からみた「ケア」（戸田） 第13回 スクールカウンセラーの活動例（戸田） 第14回 子どもの心のケア（戸田） 第15回 レポート発表「心理学からみた『子どもケア』」（戸田）			
使用教科書 なし 参考書 ①広井良典「ケア学—越境するケアへ」医学書院 ②必要に応じて参考資料を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業に関わる時事的な問題について、新聞やインターネット等を活用して理解するように努めること。			

[授業科目名] 学校保健学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 近 森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 本講義においては、現場における実際の活動から、その実態と問題を理論的観点から洗い出す。また、研究論文を通して現在の学校保健の動向を理解する。最終的には、保健管理領域および保健教育領域それぞれにおいて理想的な活動のあり方を模索し、実際の活動に適用できるようになる。			
授業の概要 学校現場との接点を大切にしながら、現場の抱える問題を客観的に分析し、よりよい学校保健活動が展開できるように授業を進めていく。授業は講義形式で行う。また、授業後に課題研究（レポート）を提出する。この課題研究は、講義の内容に基づいて提出を義務づける。			
学生に対する評価の方法 討議10%、課題研究（レポート）40%、小論文50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 授業のオリエンテーション 授業の目的、講義内容の概要の説明 第 2 回 学校保健活動の実態①（保健管理領域）対人管理編 第 3 回 学校保健活動の実態②（保健管理領域）対物管理編 第 4 回 学校保健活動の実態③（保健教育領域）保健学習編 第 5 回 学校保健活動の実態④（保健教育領域）保健指導編 第 6 回 健康教育の基盤となる学習理論① 健康信念モデル、自己効力感、変化のステージ 第 7 回 健康教育の基盤となる学習理論② 計画的行動理論、ストレス対処、社会的支援 <u>コントロール所在</u> 第 8 回 主な学習理論の現場への応用方法 第 9 回 介入研究に関する研究論文① 栄養指導に関する研究 第 10 回 介入研究に関する研究論文② 運動実施に関する研究 第 11 回 介入研究に関する研究論文③ 喫煙・飲酒・薬物等に関する研究 第 12 回 子どもの健康実態把握の仕方についての検討 第 13 回 学校保健活動のあり方① 保健管理領域 第 14 回 学校保健活動のあり方② 保健教育領域 第 15 回 まとめ、小論文提出			
使用教科書 テキストは使用しない。 <u>授業中</u> にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 学校保健の活動は幅広い領域に及んでおり、運営はさまざまな職種の人たちが担っている。どの領域もその成果をあげるためには重要である。まずは学校保健のしくみを理解し、そこで起こる問題点については、学術雑誌あるいは研究誌を読み、予め問題意識をもって講義に臨むことを期待する。			

[授業科目名] 学校保健学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 近 森 けいこ
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ <u>この授業においては</u> 、学校保健の中でも保健教育領域に着目し、分野別に養護教諭が行う保健学習・保健指導の効果的な進め方について事例を通して検討し、実際に指導案・使用する資料等を作成する。また同時に、学校保健に関わるさまざまな職種の人々が協力し合って、子どもたちにどう働きかけたらよいかについても検討する。			
授業の概要 特論で学習した内容を踏まえ、幅広い学校保健活動（とりわけ保健教育の領域について）をスムーズに進めていくための具体的な方法について検討する。通常は、 <u>模擬授業や指導案・資料作成などの演習を行いながら学校保健活動全般について理解を深めていく</u> 。また、課題研究（レポート）を課す回もあるので、準備すること。			
学生に対する評価の方法 討議10%、課題研究（指導案・レポート）40%、作成した教材・指導案50%によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 学校保健活動の実態および評価の事例① 保健管理の中で 第 2 回 学校保健活動の実態および評価の事例② 保健教育の中で（保健学習） 第 3 回 学校保健活動の実態および評価の事例③ 組織活動の中で 第 4 回 学校保健活動の実態および評価の事例④ その他の機会 第 5 回 効果的な保健教育のあり方の検討① 学級活動の指導の中で 第 6 回 効果的な保健教育のあり方の検討② 個別の保健指導の中で 第 7 回 効果的な保健教育のあり方の検討③ 学校行事の指導の中で 第 8 回 保健教育の進め方① 「環境衛生検査」「環境の安全」など 第 9 回 保健教育の進め方② 「健康状態評価」など 第 10 回 保健教育の進め方③ 「疾病管理」「安全管理」など 第 11 回 保健教育の進め方④ 「校内および校外生活の管理・指導」など 第 12 回 保健教育の進め方⑤ その他 第 13 回 学校保健活動を支える組織の再検討 第 14 回 学校保健委員会の在り方の再検討 第 15 回 これからの学校保健活動、まとめ			
使用教科書 テキストは使用しない。 <u>授業中</u> にプリントを配付する。			
自己学習の内容等アドバイス より効果的な学校保健活動を目指すには、前年度までの評価に基づいて年間計画を立てる必要がある。本演習第 1～4 回で評価の進め方について十分に復習して理解すること。その上で幅広い学校保健活動の中で具体的にどのような評価法を用いているのか検証していく予定である。			

[授業科目名] 健康教育学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 采女智津江
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・健康教育の概念を理解する。 ・保健教育（保健学習・保健指導）の内容の理解を深めるとともに、多様な指導方法について理解する。 ・学校における健康教育の進め方を理解する。 			
授業の概要 <p>本特論は、健康教育の基本的な考え方、学校における健康教育の意義・目的、学校におけるヘルズ・プロモーション（ヘルズ・プロモーション・スクール）等について理解を深めるとともに、保健教育（保健学習・保健指導）保健管理、保健組織活動のそれぞれの分野の関連性や多様な指導方法について講義や演習（ディスカッション等）を通して、総合的に理解する。</p>			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・課題レポートの作成 30 点 ・出席、授業中の授業態度（積極性・発言・質問等） 20 点 ・筆記テスト 50 点 			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本授業の目的、進め方についての説明及び受講学生相互の理解を深める。 <p>第2回 学校における健康教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康教育の基本的な考え方、学校における健康教育の法的根拠（関係法規の概要）等 <p>第3回 学校健康教育とヘルズ・プロモーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルズ・プロモーション・スクール、学校におけるヘルズ・プロモーションの進め方 <p>第4回 教科等（保健学習）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康教育に関する学習指導要領における指導内容、学習指導要領（保健）の改訂の概要 <p>第5回 特別活動における保健指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別活動における保健指導計画の立案・実施・評価方法 <p>第6回 健康観察、健康相談及び保健指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校保健安全法一部改正の趣旨・概要 <p>第7回 組織活動における健康教育（学校・家庭・地域との連携）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組織活動の意義、目的、運営及び指導方法、組織マネジメント <p>第8～10回 児童生徒の心身の健康問題への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代的健康課題 <p>第11～12回 学校における健康教育の進め方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校保健計画、学校安全計画、保健室経営計画等 <p>第13～14回 諸外国における健康教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・諸外国の健康教育の取組 <p>第15回 学習のまとめ</p>			
使用教科書 <ul style="list-style-type: none"> ・養護教諭のための学校保健（少年写真新聞社 H21）、保健室経営計画の手引（財日本学校保健会 H21） ・学習指導要領解説（保健・特別活動）、必要に応じて、資料配付する。 			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> ・保健教育に関係する教科等の学習指導要領解説をよく読んで理解する。 ・現代的な健康課題の現状について理解する。 			

[授業科目名] 健康教育学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 采 女 智津江
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校健康教育における各種の指導計画の企画・立案・実施・評価等について、演習を通して実践力を高める。 ・保健学習、保健指導に関する指導案や教材等を作成し、模擬授業を実施することにより効果的な授業ができるようにする。 			
<p>授業の概要</p> <p>健康教育学特論の授業を踏まえて、学校保健計画等の作成、教科保健*（保健学習）及び学級（HR）活動における保健指導の指導案及び教材の作成、模擬授業の実施、学校保健委員会の企画・運営等について実践的な演習を行い、健康教育の手法や技術を習得し実践力及び指導力を高める。</p> <p>*小学校は体育の保健領域、中学校は保健体育の保健分野、高等学校は保健体育の科目保健</p>			
<p>学生に対する評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演習課題の成果物（指導案、計画、運営案等）40点 ・模擬授業、プレゼン等の評価 30点 ・授業態度（積極性、出席状況、発言等）30点 			
<p>授業計画（回数ごとの内容等）</p> <p>第1回 オリエンテーション ・本授業の目的、進め方についての説明及び学生相互の理解を深める。</p> <p>第2～3回 学校保健計画及び評価計画の作成 ・グループワーク、発表、</p> <p>第4～5回 保健室経営計画の作成及び評価計画の作成 ・グループワーク、発表</p> <p>第6～9回 指導案の作成及び教材の作成 ・教科保健（保健学習）及び特別（HR）活動における保健指導の指導案を作成する。 ・作成した指導案に基づいて、教材を作成する。</p> <p>第10～11回 模擬授業の実施 ・協議</p> <p>第12～14回 学校保健委員会の企画・運営 ・議題の選定、企画、運営案、事前活動及び事後措置計画（児童生徒の指導を含む）を作成する。 ・グループワーク、発表</p> <p>第15回 演習のまとめ</p>			
<p>使用教科書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導要領解説（保健・特別活動） ・ 必要に応じて資料配布する。 			
<p>自己学習の内容等アドバイス</p> <p>効果的なプレゼンの仕方について学ぶ。</p>			

[授業科目名] 学校看護学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 中 村 朋 子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 養護教諭はけがをした本人とだけ対応するのではなく、周りにいる他者（担任、教頭など管理者、保護者等）とのコミュニケーションやインフォームドコンセントをしながら判断し、対応を決定し、救急処置・看護を行っていることを事例から学ぶ。さらに、時間の経過とともに問題は変化し、救急処置や看護は変わっていき、医療機関へ搬送するまでの処置ではなく、学校生活を円滑に過ごせるようにしながら、治癒するまで経過観察を行っていることを理解する。			
授業の概要 学校はさまざまな健康状態にある児童生徒のけがや疾病異常の発生に対応している。時には慢性疾患を抱えた児童生徒や医療的ケアが必要な児童生徒の急変に対しても、適切な救急処置・看護が出来るようにあらかじめ処置計画を立てて準備する必要性等を学校看護学の中の学校救急看護活動について講義する。			
学生に対する評価の方法 授業参加態度（自分の意見を述べる、他者の発表に自分の意見を述べる事が出来る）及びレポートにより総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校救急看護/救急処置とは 第2回 学校における救急事例の実態 第3回 救急事例に関わる対象者（傷害・疾病の急変の本人、本人をとりまく、友人、保護者、担任、校長などの管理者、医療関係者等 それぞれの特性・条件） 第4回 救急事例の判断から救急処置・看護、治癒するまでの過程 第5回 救急事例の判断について（事実判断、価値判断など） 第6回 1) 医学的・医事的判断（症状が中心） 第7回 2) 非医学的・非医事的判断（症状以外のもの 学校生活、経済的、宗教的等） 第8回 3) 事例の事実の解釈や問題点を明らかにする（対象者が事実をそれぞれに解釈し、問題点を明らかにする） 第9回 4) 問題点から対応を決定（救急車要請、受診、帰宅等、問題点は時系列で変化し対応が変わる） 第10回 5) 救急処置から治癒するまで救急処置・看護、保健指導、経過観察をする 第11回 学校救急看護体制（救急処置・看護計画） 1) 校内・校外の連絡体制 2) 救急薬品や衛生材料、施設・設備の準備 3) 現職教育 第12回 学校救急看護とコミュニケーション過程 第13回 学校救急看護とインフォームドコンセント 第14回 学校救急看護と安全教育 第15回 まとめ			
使用教科書 必要に応じて資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 現場での救急事例の判断や対応と専門書に記載されている理論とのズレ・差異について追究してみよう。			

[授業科目名] 養護実践学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 堀内久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 授業のテーマは、「養護教諭とは」「養護教諭の実践とは」を多角的に追求し考察することである。種々の資料の読みとりと批評を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成することを到達目標とする。			
授業の概要 養護教諭の歴史、「養護教諭論」の変遷などに関する資料（成書や公的文書・審議会答申など）を収集し、それらに表れた著者（研究者、実践者、市民）の「養護教諭観」を読みとる。これらの素材の読みとりと批評（討議）を通じて、受講者各自の「養護教諭観」を形成する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（40%）、課題レポート（60%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 養護実践学特論」オリエンテーション 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2回 養護の基本原理、養護の目的と機能、教育における養護 第3回 養護教諭の専門性（専門性の考え方、養護教諭の存在意義と歴史） 第4回 「養護教諭論」の変遷①養護教諭の活動と関連法規 第5回 「養護教諭論」の変遷②学校保健の領域構造と養護教諭の活動 第6回 「養護教諭論」の変遷③養護教諭の役割・機能 第7回 「養護教諭論」関連資料の収集①著書・論文など 第8回 「養護教諭論」関連資料の収集②著書・論文以外の資料 第9回 「養護教諭論」関連資料を分析・批評する視点について 第10回 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議① 資料（著書・論文）著者の立場と主張 第11回 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議② 資料（実践報告等）著者の立場と主張、実践の経過 第12回 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議③「養護教諭観」との関連 第13回 「養護教諭論」関連資料の読みとりと批評・討議④「養護教諭観」形成の過程 第14～15回 課題レポート「私の養護教諭観」発表と討議			
使用教科書 参考書 大谷尚子、堀内久美子他「新 養護学概論」 東山書房 必要に応じて参考資料を紹介・配布する			
自己学習の内容等アドバイス 1. 「養護教諭論」関連資料はできる限り広範囲にわたって収集すること。 2. 関連資料は著者自身が文章化したもののほか、聞き取りなどのオリジナルデータも含める。			

[授業科目名] 養護実践学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀内久美子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 授業のテーマ：養護教諭のすぐれた実践—その特質 授業の到達目標：受講者自身が「よりよい実践」への意欲を高めること			
授業の概要 「養護教諭の実践とは」を考察するにあたり、「養護教諭のすぐれた実践」事例を各方面から収集する。各受講者が収集事例を発表し、討議しあう。その過程で「すぐれた実践」の共通点に着目し種々の角度から考察を深め、受講者自身が「よりよい実践」への意欲を高める。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（40%）及び課題レポート（60%）で総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「養護実践学演習」オリエンテーション 授業の目的と講義内容の概要、参考書の紹介、授業日程の説明 第2～3回 「養護教諭の実践とは」：実践の特質、実践をみる角度について 第4～6回 「すぐれた実践」事例収集 第7～10回 「すぐれた実践」事例発表と討議 第11～13回 養護実践の目標と評価（特に評価の指標）について、 第14・15回 課題レポート「養護実践論」発表と討議			
使用教科書 参考書：穴戸洲美編著「養護教諭の役割と教育実践」学事出版 必要に応じて資料を紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 1. 「すぐれた実践」事例はできる限り多く収集すること。 2. 「すぐれた実践」事例は、書籍・雑誌等のほか、学会・研究会や地区での実践発表収録等からも収集することが望ましい。			

[授業科目名] 学校教育相談特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小野田 章二
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ <p>この特論では教育相談の領域、内容、形態、対象に応じた効果的な方法を探り、具体的・実践的な事例を紹介する。いま子どもたちは、社会や文化の急激な変化、家庭生活や家族関係の変化など、多様な変化の中で、人間関係や自己実現などに困難を感じ、社会的・集団的な適応にも多くの問題や課題をかかえている。こうした子どもたちに、円満な人間的発達と人格形成を実現していくためには、どのような指導や援助が求められているのかを教育相談の理論と方法さらには教育的意味や役割なども含めて、具体的に学んでいく。</p> <p>加えて、この特論では、教育相談を核に、生徒指導や進路指導の観点も含め、その連携性と役割について考察する。</p>			
授業の概要 <p>教育相談、生徒指導、進路指導は、児童・生徒の人格のより良き発達を促し、学校生活を有意義で充実したものにする役割をもっている。また、いじめ、不登校、非行等さまざまな課題が多くある現在、そうした課題にも的確に対応しなければならない。教育機能としてのこれら相談、指導は、教育課程の全領域にわたって進められるものであり、人間としての在り方生き方に関する教育である。難しく大変であるが、その意義・在り方を論じ、問題解決の方法を考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況、受講への取り組み姿勢と授業の参加度並びに試験結果を総合的に判断して、評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 学校教育相談の歴史 第3回 学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割 第4回 学校教育相談における相談係の役割 第5回 ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性 第6回 相談の目標と終結 第7回 人が人を変えるということ 第8回 不登校・いじめ・ノイローゼ等病的事例 第9回 生徒指導の意義 第10回 生徒指導の方法(集団指導・個別指導) 第11回 進路指導の目的と内容 第12回 進路指導の計画と実践 第13回 特別支援教育、クライシスセオリー、思春期の理解 第14回 教育相談、生徒指導、進路指導の連携 第15回 子どもを取り巻く社会試験			
使用教科書 <p>毎講義に配布するテキスト(レジュメ)を使用する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>日頃教育現場で問題となっていることを感心を持ち調べておくこと。</p>			

[授業科目名] 学校教育相談演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小野田 章二
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 自分自身の個性にあった「教育相談の方法」を構築するための高度な技能を身につけることを学習目標とする。不登校・いじめ問題等への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省はその施策の一環として学校教育相談の充実を目指してきた。学校教育相談の充実のためには、一人ひとりの教師の「教育相談に関する力量」の向上が必要不可欠である。この演習を通して、学校現場できちんと応用できる高度な学校教育相談の在り方を身につける。			
授業の概要 「教師」としてのありようは、この「教育相談」に対する、理解力、判断力、実践力、指導力にかかっている。「いじめ」「自殺」や「非行の低年齢化」等の今日的課題の多い中で、如何なる方法で健全な人間性の育成にあたるか、現場での実践例を多用して、その指導方法や問題点を究めたい。			
学生に対する評価の方法 随時提示する課題等に対するレポート等の内容と提出状況、受講への取り組み姿勢と授業の参加度並びに試験結果を総合的に判断して、評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンスと教育相談の意義について 第2回 学校教育相談の歴史 第3回 学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割 第4回 学校教育相談における相談係の役割 第5回 ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性 第6回 相談の目標と終結 第7回 人が人を変えるということ 第8回 児童・生徒の適応と問題行動の理解 不登校 第9回 児童・生徒の適応と問題行動の理解 いじめ 第10回 児童・生徒の適応と問題行動の理解 自殺 第11回 ノイローゼ等病的事例と教育相談 第12回 特別支援教育と教育相談 第13回 クライシスセオリーと教育相談 第14回 思春期の理解と教育相談 第15回 子どもを取り巻く社会と教育相談の意義			
使用教科書 毎講義に配布するテキスト(レジュメ)を使用する。			
自己学習の内容等アドバイス 日頃教育現場で問題となっていることに感心を持ち調べておくこと。			

[授業科目名] 学校カウンセリング特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ テーマ：子どもの成長と発達を援助する学校カウンセリングの考え方や技法の研究。 授業の到達目標：学校における子どもの今日的な課題にどのように対応するかについて理解し、学校カウンセリングの在り方の基礎を身につける。			
授業の概要 学校カウンセリングの理論や実際を追及、理解し、具体的な取り組みを探究するプロセスを通して、これからの学校カウンセリングの在り方を追求する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況（50%）、レポート（50%）を基本にし、総合的に判断して評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション 児童生徒の抱える諸問題 第2回 学校カウンセラーの役割とコンサルテーション 第3回 これからの学校カウンセリング 第4回 カウンセリングの基本技法Ⅰ 聴く・受容と共感・わかる 第5回 カウンセリングの基本技法Ⅱ 接点 第6回 カウンセリングの基本技法Ⅲ 構成的エンカウンター等 第7回 校内連携・校外連携 第8回 子どものサインを受け止める 第9回 子どもを取り巻く社会のコーディネーション 第10回 家庭を見直す 第11回 学校カウンセリングⅠ 生徒指導と教育相談 第12回 学校カウンセリングⅡ 反社会的行動と非社会的行動 第13回 学校カウンセリングⅢ 不登校・神経症・非行 第14回 学校カウンセリングⅣ 広汎性発達障害 第15回 まとめ			
使用教科書 『学校カウンセリングの基本技法』長坂正文 ほんの森出版			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。			

[授業科目名] 学校カウンセリング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ テーマ：学校カウンセリングの今後の在り方及び方法 到達目標：学校での児童、生徒のこころの問題に対処するためのカウンセリングの基礎、及び、保護者へのカウンセリング・相談に対処できる基礎的能力を身につける。			
授業の概要 学校カウンセリング、コンサルテーションと学校の連携、学級経営、発達障害児へのカウンセリングが必要とされる技術など、討議、グループワーク、ロールプレイを通して、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 授業への取り組み状況（20%）、レポート（20%）、試験の結果（60%）等を総合的に判断して評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション カウンセリングの「心」と「構え」の重要性 第2回 学校コンサルテーションの事例 第3回 かかわりづくりに関するグループ実習（その1） 第4回 かかわりづくりに関するグループ実習（その2） 第5回 非言語的てがかり 第6回 傾聴実習（その1） 「聞く」と「聴く」の違い（ロールプレイ） 第7回 傾聴実習（その2） 質問法（ロールプレイ） 第8回 傾聴実習（その3） 言い換え・繰り返し（ロールプレイ） 第9回 傾聴実習（その4） はげまし・感情の反応（ロールプレイ） 第10回 総合演習（その1） 不登校の事例（ロールプレイ） 第11回 総合演習（その2） 進路問題の事例（ロールプレイ） 第12回 総合演習（その3） 摂食障害の事例（ロールプレイ） 第13回 その他の事例（その1） 非行・いじめ・友人関係の悩み 第14回 その他の事例（その2） 強迫神経症・家庭内暴力・広汎性発達障害 第15回 保護者への対応			
使用教科書 『相談活動に生かせる15の心理技法』『月刊学校教育相談』編集部編 ほんの森出版 『「生徒指導・教育相談」研修』有村久春編集 教育開発研究所			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業における「キーワード」について調査・理解し、必ず事前学習を行っておく。			

[授業科目名] 学校心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 戸田 須恵子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「学校心理学について学ぼう」をテーマに、学校心理学の基本である心理教育的援助に関する基礎知識及びスクールカウンセラーに関する知識の習得を到達目標とする。			
授業の概要 学校教育の中で、一人ひとりの子どもが学習や対人関係、進路指導等で出会う様々な問題を解決するためにどのような援助ができるのか等、子どもの成長を促進する心理教育的援助サービスについて学習する。問題解決には、子どもを取り巻く教師や保護者などとのチームワークが必要である。授業は、これらを含む心理教育的援助に関する基礎的知識を学習し、事例を通して援助者に関する知識も学習する。			
学生に対する評価の方法 レポートによって評価する（2回程度—内容とまとめ方を重視）。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校心理学の授業と評価の仕方についてのガイダンス。授業の進め方について討論 第2回 学校心理学とは ヒューマン・サービスとしての学校教育について 第3回 アメリカ、日本における学校心理学 第4回 心理教育的援助サービスの基礎概念 第5回 心理教育的援助を担う4種類のヘルパー 第6回 学生からの体験談発表（ケース研究） 第7回 3段階の心理教育的援助サービス 第8回 スクールカウンセラーに求められる役割 第9回 スクールカウンセリングの特徴 第10回 心理教育的アセスメント —心理教育的援助サービスの基盤として— 第11回 スクールカウンセリングの実際 —子どもとのかかわり— 第12回 スクールカウンセリングの実際 —保護者とのかかわり— 第13回 教師、保護者、学校組織へのコンサルテーション —児童生徒へのチーム援助について— 第14回 外部機関との連携について 第15回 学校心理学と今後の課題、授業のまとめと全体的討論			
使用教科書 「学校心理学」 石隈利紀著 誠信書房（2009） 第15刷			
自己学習の内容等アドバイス 復習をして学校心理学についての知識を習得し、自分の仕事の中でどのような援助ができるかを考える力をつけてほしい。			

[授業科目名] 学校心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 戸田 須恵子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「実践力を高めよう」をテーマとし、学校心理学特論で学んだ心理教育的援助に関する知識を現場で生かすことのできる実践力の習得を到達目標とする。			
授業の概要 授業は実践研究論文の講読と発表・討論を中心に授業を行う。最初は、学校心理学に関する先行研究論文の講読を通して論文の読み方や書き方について学習する。次に、受講者は自己の研究課題に関係のある実践研究論文を検索してそれを発表し、全員でその研究について討論する。又、学校現場においてどのような心理教育的援助ができるのか、援助チームシートを活用して討論し、現場で役に立つ知識を学習する。			
学生に対する評価の方法 発表と授業中の活動態度（40%）とレポート（内容とまとめ方を重視、60%）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション。授業の概要と評価について説明 第2回 学校における心理教育的援助サービスについて討論 第3回～4回 実践研究論文講読—研究論文の読み方について学習及び討論 学会誌（教育心理学研究など）より選択 第5回～6回 実践研究論文講読—研究内容について学習及び討論 学会誌（教育心理学研究など）より選択 第7回～8回 受講者の発表及びグループで討論。 第9回～10回 苦戦している子どもをどう援助するか全体的討論 第11回～12回 ケース研究 実際のデータを分析し発表、討論 第13回～14回 心理教育的援助の実践に向けて（援助チームシートの書き方を学習） 第15回 心理教育的援助の実践における援助チームシートの活用と討論。まとめ			
使用教科書 「チーム援助入門—学校心理学・実践編—」 石隈利紀・田村節子著 図書文化（2003）			
自己学習の内容等アドバイス 多くの研究論文を読んで学校心理学の知識を深め、現場で生かせるような学習方法を考えよう。			

[授業科目名] 学習心理学特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 赤嶺 亜紀
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ <p>この授業では学習や教育の基本原理の理解を目標とするが、科学的な知見を教育の実践（例えば、学習指導や教材・教育技術の開発）へ発展させる素地を養いたい。</p>			
授業の概要 <p>学習心理学は、学習の基礎的過程を扱う領域であり、その研究は大きく分けて2つの流れがある。ひとつは主として動物を対象として行われた条件づけの研究であり、もうひとつは人間の記憶の研究である。本講義ではこの2つの問題を中心に解説する。その際、近年の脳科学や進化心理学の見解に言及し、人間の適応について検討を重ねる。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>評価のウエイトは学期末試験の成績におくが、平常の授業態度（発言や質疑、討論への参加など）を考慮する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1回 導入：学習心理学とはなにか 第 2回 学習の理論（1）： 古典的条件づけ 第 3回 "（2）： オペラント条件づけ 第 4回 "（3）： 学習の認知理論 第 5回 記憶と理解（1）： ヒトの情報処理活動 第 6回 "（2）： 記憶のしくみ 第 7回 "（3）： 概念形成 第 8回 "（4）： 問題解決 第 9回 動機づけ（1）： 動機の種類 第 10回 "（2）： 学習・教育と動機づけ 第 11回 個人差の測定と評価（1）： 心理教育的アセスメントの方法 第 12回 "（2）： 心理検査の活用（知能検査など） 第 13回 児童・生徒の理解と指導（1）： 学習指導と授業 第 14回 "（2）： 学級集団の人間関係 第 15回 まとめ： 科学的な研究と教育の実践</p>			
使用教科書 <p>山内光哉・春木豊 編著 『グラフィック学習心理学 ～行動と認知～』サイエンス社 必要に応じて資料を配布する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>適宜、授業の際、参考文献を紹介するが、自らの興味にそって自発的に読書することをすすめる。</p>			

[授業科目名] 学習心理学演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 赤嶺 亜紀
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ <p>実習体験を通して、心理学の基礎的な研究法と科学論文の書き方の修得をめざす。そして、実証的に心理的事象を論じ、人間の行動を科学的に理解する態度を養う。</p>			
授業の概要 <p>心理学は行動の科学であるが、その基本的な研究方法は観察法と実験法、調査法、検査法に大別される。この授業では受講者自らが実験に参加して（あるいは調査や検査を実施して）、人間の行動データを記録、取得する。そしてそれらのデータを解析し、レポートを作成する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>6種の課題それぞれについてレポート作成を求める。ここで課すレポートは科学的報告書であり、事象を客観的、合理的に記述することを重視する。 授業で行う課題はいずれもグループ活動を求めるものであり、各人の積極的な取り組みが不可欠である。成績の評価は、各自のグループ活動への貢献度を考慮する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1回 導入： 心理学の研究方法 第 2回 課題 1： 実験法 学習の転移 (1) 第 3回 " (2) 第 4回 レポートおよび研究論文の書き方 第 5回 課題 2： 実験法 ストループ効果 (1) 第 6回 " (2) 第 7回 課題 3： 行動観察 (1) 第 8回 " (2) 第 9回 課題 4： 心理社会調査法 (1) 第 10回 " (2) 第 11回 課題 5： 心理検査法 田中・ビネー知能検査 (1) 第 12回 " (2) 第 13回 課題 6： 心理検査法 ウェクスラー式知能検査 (1) 第 14回 " (2) 第 15回 まとめ： 研究計画の立案、研究の倫理</p>			
使用教科書 <p>宮谷真人・坂田省吾 編著 『心理学基礎実習マニュアル』 北大路書房 必要に応じて資料を配布する。</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>適宜、授業の際、参考文献を紹介するが、自らの興味にそって自発的に読書することをすすめる。</p>			

[授業科目名] 特別支援教育特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉川 吉美
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 地域の特別支援学校（養護学校）や普通学校にある特別支援学級又普通学級に在籍している特別支援教育を必要としている児童生徒に対して適切な特別支援教育が実践されるためにはどのような事が望まれるのか？どうしたら良いのか？とか言った事を検討し、特別支援教育の理解と認識を深める。			
授業の概要 特別支援教育における教育実践とその課題について特別支援児の障害の理解と支援あり方、方法に焦点をあて講義を展開する。			
学生に対する評価の方法 評価は、授業中の活動度（30%）、課題の発表・討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1回 オリエンテーション 第 2回 特別支援教育の意味 第 3回 特別支援児 とは 第 4回 特別支援教育の対象の拡大 第 5回 特別支援教育の課題 第 6回 特別支援児の診断と理解① 第 7回 特別支援児の診断と理解② 第 8回 特別支援児（知的障害）の心理特性とその検討 第 9回 特別支援児（自閉性障害）の心理特性とその検討 第 10回 特別支援児（学習障害）の心理特性とその検討 第 11回 特別支援児（注意欠陥多動性障害）の心理特性とその検討 第 12回 特別支援児（肢体不自由児）の心理特性とその検討 第 13回 特別支援児（盲、聾啞児）の心理特性とその検討 第 14回 特別支援児（虚弱児）の心理特性とその検討 第 15回 まとめ			
使用教科書 「特別ニーズ教育」「特別支援教育」と障害児教育 森博俊他著 群青社			
自己学習の内容等アドバイス 地域の特別支援学校及び特別支援学級の実状を調べることを勧める			

[授業科目名] 特別支援教育演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉川 吉美
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 就学前、小・中学、高等学校、の年代で特別支援教育が必要な意味を、様々な角度から、現状と課題を捉え、より良く充実するにはどのような取り組みが望ましいのか検討し特別支援教育の理解を深める。特別支援教育現場の見学も検討したい。			
授業の概要 特別支援教育の理念と基本的な考え方を基礎に、特別支援児が就学前から高等教育又は特別支援学校を卒業し地域社会に出て社会適用するまでのライフステージを検討する。			
学生に対する評価の方法 評価は、授業中の活動度（30%）、課題の発表、討議（30%）、レポートの提出（40%—内容とまとめ方）で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 特別支援教育の理念と基本的な考え方 第 3 回 特別支援教育の展開 第 4 回 特別支援児の障害の原因の分類 第 5 回 特別支援児の診断と理解の意味 第 6 回 ユニバーサルデザイン 第 7 回 地域で共に学び共に生きる教育 第 8 回 就学前における特別支援教育の充実化と対策 第 9 回 小・中学校における特別支援教育の充実化と対策 第 10 回 高等学校における特別支援教育の充実化と対策 第 11 回 特別支援学校における特別支援教育の充実化と対策 第 12 回 地域において特別支援教育の充実化と対策（他機関との連携①） 第 13 回 地域において特別支援教育の充実化と対策（他機関との連携②） 第 14 回 特別支援教育に携わる教員に求められる専門性 第 15 回 まとめ			
使用教科書 「特別ニーズ教育」「特別支援教育」と障害児教育 森博俊他著 群青社			
自己学習の内容等アドバイス 児童白書等の白書で日本の現状を調べることを勧める。			

[授業科目名] 障害児教育特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 戸田 須恵子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「障害児教育について学ぼう」をテーマに、様々な障害を持っている子どもを教育するには、どのような支援をすればよいか、障害児に関する知識と支援の方法を習得することが到達目標である。			
授業の概要 障害児教育を発達の見点から捉え、障害児の発達について基礎的知識を学習する。次に、障害児教育から特別支援教育へと転換してきた過程を理解し、特別支援教育がどのように実施されてきたのか教育課程や法律などを取り入れ、特別支援教育についてより深い知識を学習する。又、小学校や中学校、特別支援学校の現場における障害児の発達と教育の支援に役立つ知識を学習する。			
学生に対する評価の方法 3回程度の課題を出し、レポート提出によって評価する。レポートは、内容（50%）、まとめ方（50%）の割合で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。授業についての概要及び評価について説明 障害児について受講生と意見交換 第2回 障害を理解するための生理学的基礎と発達 第3回 発達視点からの教育について 第4回 特別支援教育1 特別支援教育の基礎理論について 第5回 障害児の基本的視点について、特別支援教育への転換について 第6回 特別支援教育の展開 第7回 小中学校における特別支援教育について 第8回 特別支援体制を支える専門性について 第9回 特別支援教育における教育課程の編成、自立活動の指導について 第10回 特別支援教育2 特別支援教育の指導法について 第11回 障害の理解の意義と方法について 第12回 障害（視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由）の理解について 第13回 障害（病弱・言語障害・情緒障害・軽度発達障害）の理解について 第14回 青年期における障害児について（進路と社会について） 第15回 障害児教育（特別支援教育）と発達支援について討論			
使用教科書 講座 特別支援教育1（特別支援教育の基礎理論） 佐藤佐和編、教育出版（2006） 講座 特別支援教育2（特別支援教育における障害の理解） 前川久男、教育出版（2006）			
自己学習の内容等アドバイス 復習をして障害児についてより深い知識を習得してほしい。			

[授業科目名] 障害児教育演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 戸田 須恵子
[単位数] 2	[必修・選択] 選択	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 「障害児教育力の向上」をテーマに、特別支援教育についてより深い知識を学習し、アセスメントの知識と技能を習得し、障害児に対する教育力を高めることを到達目標とする。			
授業の概要 障害児の発達と障害児を取り巻く環境（家庭、社会など）との関係を理解した上で、障害児の教育方法を学習し、特別支援教育についての専門性を高める。特別支援教育の指導法とアセスメント方法を学習する。さらに、特別支援教育に関する研究論文を講読し討論する。又、各自が障害児に関する研究論文や実践報告などを発表し討論する。			
学生に対する評価の方法 研究論文の発表とレポートによって評価する（発表内容とレポートのまとめ方を重視、80%）。さらに、授業中の活動態度（質問や意見など）も評価する（20%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。授業の概要と評価について説明。障害児に関して意見交換 第2回 障害児の発達と障害児を取り巻く環境との関係について社会での出来事や実践報告などを利用して討論 第3回 特別支援教育の指導法について—視覚・聴覚・知的障害・病弱— 第4回 特別支援教育の指導法について—情緒障害・言語障害・軽度発達障害— 第5回 障害児のアセスメントについて—視覚・聴覚・知的障害— 第6回 障害児のアセスメントについて—情緒障害・言語障害・軽度発達障害— 第7回～8回 アセスメント用具を使用してアセスメントの練習 第9回～10回 各自が関心のある研究論文を検索して発表① 全体で討論 発表者はレポート提出 第11回～12回 各自が関心のある研究論文を検索して発表② 全体で討論 発表者はレポート提出 第13回～14回 学校や施設などへ出かけて障害児とのコミュニケーションを体験し障害児についての理解を深める。 第15回 障害児とのコミュニケーションの体験を発表、討論。 レポート提出			
使用教科書 講座 特別支援教育3 （特別支援教育の指導法） 安藤隆男編 教育出版（2010）			
自己学習の内容等アドバイス 復習をして、障害児教育に関する知識を習得し、現場で活かせる教育力の向上を目指そう。			

[授業科目名] 特別研究		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 末松弘行、Michelle H. Morrone、 村岡眞澄、平井タカネ、戸田須恵子、 松岡 宏、中村朋子、堀内久美子 采女智津江、近森けいこ 赤嶺亜紀、西村美佳
[単位数] 8	[必修・選択] 必修	[備考]	
授業の到達目標及びテーマ 修士論文の作成に向けて、関係する論文の読み方、書き方を理解し、各々が設定した研究課題に関する修士論文を作成していく。			
授業の概要 授業は、個別指導とゼミナール形式で行う。個別指導においては、関連する論文を通して論文の読み方、書き方の指導を行う。また、ゼミナールでは各自が自分テーマと関連した研究論文を検索し発表する。発表後は内容を検討しながら個々の問題を明らかにし、修士論文作成まで指導を行っていく。			
学生に対する評価の方法 研究への取り組み度並びにゼミナールのプレゼンテーション力など総合的に評価を行う。			
授業計画（回数ごとの内容等） オリエンテーション・個人指導・ゼミナール等を適宜実施していく。			
使用教科書 適宜紹介をしていく			
自己学習の内容等アドバイス 2年間の研究成果が導き出せるよう、積極的に取り組むこと。			